

令和5年度 保健教育 研究のまとめ

田野原 佑美・後藤 美由紀

1. 研究会等で明らかになった教科等の資質能力の具体

(1) 小学校 健康教育 6年「保健だよりをつくろう」

資質能力	児童・生徒の姿	手立て	キーワード
授業 構想力	○作成したい保健だよりの目的を理解し、作成するイメージをつかむことができていた。	保健だよりの作成にあたり、1年前の手洗いの実験と情報検索学習の振り返りを行い他教科既習事項と関連付けた。 問題意識が明確になるように現在の東雲小学校の感染症対策の実態を取り上げた。	学習のつながり、目的の明確化、問題解決の支援
授業 実践力	●情報源の吟味および活用した情報の正確性の検証が行えなかった。	情報の正確性について既習の情報検索のポイントを振り返るだけでなく、具体的な例を出すべきであった。	思考の深まりへの支援
	○多様な表現方法が理解できていた。	多様な児童が作成した保健だよりを提示し、情報活用方法・表現方法を理解できるように共有した。	見方や考え方を広げる
授業 分析・ 評価力	○感染症予防のための自身の手洗いについての意欲が高まっていた。	感想として、2時間の授業を振り返る場を設定した。	気付きを促す支援、学習と生活のつながり

(2) 中学校 3年「ピンチに使えるストロングポイント」

資質能力	児童・生徒の姿	手立て	キーワード
授業 構想力	○今の自分の内面をふまえて自己理解を深めたり、行動変容の意欲を高めたりすることができた。	事前に行った自己肯定意識尺度の測定により集団の実態を把握し、授業の展開に反映させた。	目的の明確化
授業 実践力	○ストロングポイントを活用しピンチを解決する際に、自己だけでなく他者にもメリットがある活用法を考えることができていた生徒の対人不安が軽減した。	個々のストロングポイントを活用することのできる場面の選択肢を増やすため、あ全体やグループでピンチの場面を出し合った。	問題解決の支援、見方や考え方を広げる
	○授業後の感想に「一人一人違っておもしろい」「自分のストロングポイントを全体のために使いたい」という記述が見られた。	他者理解を深めるために、肯定的な意見を出し共有するグループでの活動を設定し、授業後の学級活動でも安心感が持てるようにした。	気付きを促す支援、学習と生活のつながり

授業分析・評価力	○第1時・第2時ともに参加した生徒全員が、自己のストロングポイントを見出し、それを活用する具体的なピンチの場面を想定することができていた。	2年時の授業で各自が考えたことを印刷したワークシートを用いて、自己の成長をふまえ、より多様な思考や自己省察が肯定的にできるようにした。	見方や考え方を広げる、問題解決の支援、学習のつながり
----------	---	---	----------------------------

2. 研究についての考察

今年度の研究を通して、保健教育本来の魅力に迫るための教師の資質能力を表1に示すように、再検討した。

表1 保健教育の本来の魅力に迫るための教師の資質能力

資質能力	保健教育が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	<ul style="list-style-type: none"> ・保健室内外で得られる様々な学校保健情報から対象集団の健康課題を把握する。 ・多様な現代的な健康課題についての視点を持つ。 ・各学年・学級の実態・健康課題に応じた目標設定を行う。 ・他の教員と連携をとり、学習指導要領に基づいて各教科等での既習内容や系統性をふまえた指導内容を考える。 ・科学的根拠をふまえ、児童生徒の思考の流れに沿った展開を考える。 ・学校医やカウンセラー、栄養教諭、その他地域の専門機関等、適切な専門家と連携する。
授業実践力	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒が思考を深めるための展開に併せて、必要な科学的根拠をわかりやすく提示・解説する。 ・主体的な健康課題解決能力を育成するために、行動変容のための実践的な知識・技術を提示する。 ・個々の児童生徒の特性に応じたユニバーサルデザイン（視覚支援・ワークシートの作成等）を取り入れることを意識する。
授業分析・評価力	<ul style="list-style-type: none"> ・授業計画や発話記録等を含んだ実践記録により、児童生徒の行動変容に対する効果を検証する。 ・授業中の発言やワークシートへの記入内容と授業前後の児童生徒の言動を結び付けて分析する。 ・他の教職員・保護者などと連携して授業前後における児童生徒の変容を見取り、指導の効果を検証する。

研究会で実施した単元における授業分析や指導助言の内容から、授業構想力では「他の教員と連携をとり、学習指導要領に基づいて各教科等での既習内容や系統性をふまえた指導内容を考える」ことの重要性が小・中それぞれで再確認できた。

特に小学校では、保健指導の構想でその内容の系統性を検討して、他教科での既習内容を反映させるなど教科横断的な取り組みを行ったことにより、学習効果があったと考えられる。

また中学校では、授業分析・評価力の部分で、保健指導の持つ特性から数値等の量的な面からの分析では見えない授業の効果も考慮し、生徒の行動変容に対する効果を感じ記述から質的に分析した。その結果、想定していた以上の気づきを生徒が得たことを読み取ることができた。

以上のことから、本研究を通じた成果と課題は以下のようにまとめられる。

成果	課題
<p>・「授業構想力」の「他の教員と連携をとり、学習指導要領に基づいて各教科等での既習内容や系統性をふまえた指導内容を考える。」について、指導での児童の変容や指導助言の内容を基に、児童への学習効果や今後の保健指導の可能性を明らかにすることができた。</p> <p>・生徒のワークシート記述から、「健康課題の把握・健康課題に合わせた目標設定（授業構想力）」「行動変容のための実践的な知識・技術を提示する（授業実践力）」について、教員の資質能力を活用した効果を明らかにすることができた。</p>	<p>・授業によって目指す児童生徒の変容を踏まえ、授業内・授業後の児童生徒の姿を想定したルーブリックの評価項目設定を検討する必要がある。また、その検討と併せて学習活動・展開の再検討も必要になると考える。</p>